



令和5年度 第64号
令和6年3月22日
熊本市立本荘小学校
校長 西川 英臣

3月21日は第148回卒業証書授与式でした。今年度の校長式辞。



昨日は、本荘小学校の第148回卒業証書授与式でした。12人の6年生は立派に卒業していきました。熊本地震を経験し、コロナ禍の中で過ごした小学校生活。でも、地震やコロナウイルスに負けずに育った立派な子どもたちです。一人一人が卒業証書もらった後に、自分の夢や未来を力強く宣言し、この学び舎を旅立っていきました。私が赴任以来、3年間を共にしたかわいい卒業生たちでした。

校長式辞では、「大人になるための二つのお話」をさせていただきました。一つ目は、世界的な指揮者である小澤征爾さんのお話です。もう一つは、実在の人物ではないのですが、宮沢賢治の「グスコーブドリの伝記」という作品の主人公のお話です。

小澤さんのお話は、「夢や希望を持ち、その実現に向けて努力を続けていくこと」についてです。ご存じの方も多いとは思いますが、小澤征爾さんは日本を代表するとともに、世界的なマエストロです。そして、西洋文化としてゆるぎないクラシック音楽の世界で、日本人として活躍をした方です。誰もが、活躍できなくても仕方ないと思っていた時代に、その世界に挑戦を続けていった方です。その並外れた行動力によってこれまでの常識を覆していったのです。これからの社会は変化の激しい社会です。度重なる災害、国際情勢の不安、生成AIによる社会構造自体の変化、刻々と急激に世の中が変わっていきます。これからの子どもたちは、そのような社会の中で、未来を切り拓いていかなければなりません。そのために、6年生には前号でイチロー選手の作文で、「夢をかなえる」ことについてのメッセージを送りました。実は18日には、校長先生からの最後の授業ということで、「いのちを守るものは何か」という授業も行っています。ですので、小澤さんの行動力をぜひとも紹介したかったのです。

グスコーブドリのお話は、有名な作品ですので、ご存じの方も多いでしょうね。詳しくは裏面の校長式辞全文をお読みください。誰かのために自分の人生を捧げた主人公の生き方は、これからの自分がどうあるべきかを考えさせてくれます。もちろん自分の命は大切です。ですので、命を投げ出すという行為には賛成できません。しかし、これからの社会は仲間とともに生きていくことが大切です。その仲間を大切にするために、守るために自分は何ができるかを考えてほしかったのです。なぜ、この話題を取り上げたかといいますと、最近「グスコーブドリの伝記」の演劇を見る機会があったのです。もともと知っていた話でしたが、人としてどう生きるか悩み、考え、仲間や師を想い、決断をしていく主人公たちを一生懸命に演じる方々の演技に、この作品の大切さを改めて考えさせられました。校長式辞は、卒業生に送る最後の饒の言葉です。ですので、この話を卒業生と、式に参加されたみなさんへ、校長としての心からのメッセージとして伝えたかったのです。

12人の卒業生は、私の教え子でもあります。これからもずっと応援していきたいと思っています（校長）謙虚

（裏面：校長先生の虫眼鏡「卒業証書授与式 校長式辞」）

校長先生の虫眼鏡 「第148回卒業証書授与式 校長式辞」

式 辞

暖冬といわれつつも、寒さが激しい日々もあったこの冬。その季節も終わりを告げ、校内の花々が柔らかな光の中で輝こうとしています。

本日、このよき日に、ご来賓の皆様にご臨席をいただき、保護者の皆様に見守られながら、第148回卒業証書授与式を挙げてまいりましたこと心より感謝申し上げます。さて、卒業証書を手にした12人の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。その卒業証書は、六年間、皆さんが多くのことを学び、心も体も大きく成長した証です。また、皆さんの成長を願い、ここまで育ててくださったご家族の深い愛情、あなた方にお寄り添い育ててきた先生方の努力、かわいがってくださった地域の皆様や、また込められています。多くの方々に支えられて成長するできたことを忘れず感謝の心とともにその卒業証書をいつまでも大切にしていって欲しいと思います。

皆さんはこの六年間、本当によく頑張りました。特に、この令和5年度は、最学年としての重い責務にも負けず、いろいろなことに懸命に取り組んでくれました。朝のボランティア活動。暑かった夏。寒かった冬。1年生のお手本となって草抜き、石拾い、落ち葉掃きと学校中をきれいにしてくれました。また、縦割り班での色々な活動を、常に先頭に立って取り組んでいました。秋の運動会では、高学年のリーダーとして表現運動「開幕宣言～明日への第一歩～」に取り組みました。4年生、5年生と協力しながら、低学年の子どもたちに「小さな学校でもここまでできるんだ」、「ここまで人の心を揺さぶるパフォーマンスができるんだ」という自信を持たせてくれました。運動会だけではありません。すこやか集会やわくわく集会において、最上級生として、みんなのために行動してきたあなた方の姿は他の学年の子どもたちにとって「これからの自分のあるべき姿」となっていたのです。みなさんの常に責任感をもって取り組もうとする姿は、子どもたちだけでなく、私たち大人にも感動を与えてくれました。この伝統ある本荘小学校にふさわしい6年生でした。

皆さんは、4月から中学生です。中学生は大人になる準備の期間です。誰かが大人してくれるのではありません。自分で自分を大人に成長していくのです。そのために、二つのことをお話します。よく聞いておいてください。

みなさんが生まれ、生きていくこの時代は、めまぐるしく変化の激しい社会となっています。アメリカのデビットソンという学者が「2011年度に小学校に入学した子どもの65%は、今は存在していない職業に就く」と言ったことが話題になったことがあります。そうです。特に今は、生成AIの開発等によって、社会自体が大きく変わろうとしています。そんな時代だからこそ、大切にしてほしいことが二つあるのです。

一つ目は、「夢や希望を持ち、その実現に向けて努力を続けていくこと」です。先月、小澤征爾という指揮者の方がお亡くなりになりました。ニュースでも報じられましたのでご存じの人も多いと思います。クラシック音楽の世界で「世界の小澤」と呼ばれた偉大なマエストロです。西洋文化そのものと言えるクラシック音楽の世界で、日本人が活躍する道を切り開いた人物です。欧米の名門オーケストラを率いて名演を重ね、何事にも「日本初」「東洋初」がついて回った偉人です。その人生は、常に世界への挑戦であったといえます。例えば、大学卒業後に、フランスで音楽を勉強するために、旅客船ではなく、貨物船に乗り込んだといえます。上陸地のマルセイユからは、なんとスクーターに日の丸をつけてパリを目指したといえます。その後、海外で実力を発揮し、ウィーン国立劇場の音楽監督に東洋人として初めて就任するなど世界に認められた日本人となりました。ご自身の国際的に活躍した経験から、「もっと世界と混ざらなさい。絶対狭くなっちゃだめ」と語り、後進の指導にも情熱を傾けたそうです。小澤氏は、夢の実現のために、常に並外れた行動力を発揮しています。その生き方から学ぶことができることは、自分が強い意志を持ち、何かを成し遂げたいという信念を持って、努力を積み重ねることが、「夢の実現」につながるのだということです。そして、決してあきらめないことです。途中で大きな壁にぶつかったり、うまくいかなかったりすることがあっても、努力を続けることで、新しい可能性を開いてほしいと思います。あきらめずに粘り強くです。

二つ目は、「人を大切にしてほしい」ということです。みなさんは、この六年間「仲間」として、ともに支え合い、助け合ってきたはずで、「人は、出会いによって知人になり、付き合いによって友達になり、助け合いによって仲間になる。」という言葉があります。助け合いとは、協力しお互いを支えあっていくことです。自分にとって都合のよいことを言うてくれることではありません。時には相手のことを考え厳しく注意することもあります。楽なことに流れそうときに、戒めてくれる、それが仲間です。先ほど言いましたが、変化の激しい社会だからこそ、みんなて知恵を出し合い、自分たちで考え、解決していくことが求められます。そのために、中学校生活で、そしてその先の人生でも「仲間」を作り上げ、助け合って問題を解決していかけてください。そこで、人や仲間を大切にしたいある人物のお話を紹介します。

「グスコブドリの伝記」という小説があります。作者は、宮沢賢治。童話作家で、五年生で学習する「注文の多い料理店」や「銀河鉄道の夜」、「やまなし」という童話を書いています。宮沢賢治自身も、自分以外の誰かのためにその人生を捧げたことで有名な人です。

その宮沢賢治が描いた「イーハトーブ」という世界を舞台にしたお話です。結末はすごく悲しい物語ですが、人はどう生きるべきかを考えさせられる名作です。こんなお話です。グスコブドリのイーハトーブの森に暮らす木こりの息子として生まれます。しかし、冷害による飢饉で両親を失い、さらに妹と生き別れ、工場に労働者として拾われます。しかし、今度は、火山の噴火で工場が閉鎖するなどといった数々の苦難を経験していきます。しかし、ドリは負けません。農業の世界で努力を重ね、クーパー大博士という人に出会って、学問の道に入ります。その後、イーハトーブ火山局の技師となり、身に付けた知識をいかして、火山の被害を軽減したり、人工的に雨を降らせたりして、人々を救っていくのです。

そして、生き別れた妹とも再開し、自分の以外の誰かを救うために努力し、苦勞した分、幸せな人生がやってこようとしていました。

ところが、ドリがまだ27歳のとき、イーハトーブはまたしても深刻な災害に見舞われます。その災害から人々を救うためには、火山を人工的に爆発させなければなりません。ドリは災害を回避するためある方法を提案します。それは、誰かが残って、火山を爆発させるスイッチを押さなければならぬという方法です。つまり、誰か一人は噴火から逃げるのができないということになります。もし、私たちがドリと同じ立場だったら、どのように行動するのでしょうか。考えてみてください。お話の中では、犠牲を覚悟したドリが、妹や恩師である博士や技師に止められながらも、彼らを冷静に説得していきます。そして、最後の一人として火山に残ったドリが火山を爆発させること、災害は食い止められ、イーハトーブは救われます。悲しい最後です。私は、誰かのために命を犠牲にしてほしいとは思いません。自分の命もほかの命と同じように重く大切に。みなさんには、ドリらの行動とは別の方法を考えて生き抜いてほしいと心から願います。しかし、ドリは、悩みながら、苦勞しながら、涙をこらえて必死に大切な家族や大事な仲間を救う方法を考えたのです。私たちは、その姿に学ぶことが大切だということです。作者の宮沢賢治も自分以外の人を大切に生きてきた人です。体の弱かった賢治は、体調がすぐれなかったにもかかわらず、農家の人の相談に付き合い、体調を悪くし帰らぬ人となったそうです。つねに、自分以外の誰かのことを思いやり、「仲間」を大切にしたい宮沢賢治の姿は、グスコブドリの姿と重なります。彼らの生き様は、これからの時代を生きていくみなさんにとって、一つの道標になるのではないかと思います。そして、人を大切にすることで、他の人から大切にされるものです。そうやって幸せな人生を歩んでほしいと心から願っています。幸せになってください。

さて、保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。愛情いっぱい家庭の温かな子育てが、一人一人の子どもたちの個性となり、六年間の小学校生活を経て、このような立派な12人の卒業生となりました。大切なお子様をお預かりして六年間、「なかよく・かしく・たくましく」の校訓を元に、「あいうえお」いっぱいの子どもの育成をめざして、職員一同全力で教育に取り組んでまいりました。その間には、熊本地震も、新型コロナウイルス対応もありました。学校だけでなく、ご家庭にとっても、決して平穏無事な道ではなかったこととお察しいたします。この六年間の皆様方の絶大なご理解とご協力はどんな時も私たちの大きな支えとなりました。心より感謝申し上げます。また、ご来賓の皆様には、ご多用な中にご臨席を賜り、誠にありがとうございます。ご覧頂きましたように二人の卒業生は、皆明るく立派に育ちました。これもひとえにご来賓の皆様のお力添えによるものであります。子どもたちとともに感謝申し上げます。

結びとなりましたが、卒業生の皆さん、これからも、お互いを大切にし、思いやりの心を育てながら、未来を切り拓いてください。先生たちは、いつまでもいつまでもあなた方の味方です。皆さんの限りない発展・成長と幸多き人生であることを願い、名残は尽きませんが式辞といたします。

令和6年3月21日

熊本市立本荘小学校長 西川 英臣